

寺院と公共性

お寺を支える仕組み ③

人々が回帰するまちづくり

— 歴史の共有と継承力 —

●「番方講」と歴史の共有

この中で、「ダーナ講」は婦人会組織を活発にするために、近年新たに生まれたものである。いわば、現代版の「講」である。それ以外の「講」は、いずれも長い活動の歴史を持つものばかりである。

●滋賀教区調査と「講」

二〇一三（平成二十五）年度、浄土真宗本願寺派総合研究所が実施した滋賀教区における寺院調査において、顕著な特徴の一つとして見えてきたのは、「講」の存在である。浄土真宗の信仰が各地に浸透していった中世以降、各地でお念仏を喜ぶ人びとの集まりが自然発生的に生まれ、「講」を形成していった。「講」は、お念仏を喜ぶ仏法聴聞（ぶつぽうりょうもん）の場であるとして

もに、信仰を「共にする」ものどうしが集まることによって、地域の人びとのつながりを作り、相互扶助を促進し、コミュニティの精神的な基盤となってきたとされる。

調査の中で、確認された「講」は、次の五つのものである。

- (1) 番方講
- (2) 二十五日講
- (3) 尼講・男講
- (4) のほり講
- (5) ダーナ講

こうした種々の「講」の中から、「番方講」についてご紹介しよう。「番方講」は、比叡山と本願寺が対立し、蓮如上人が越前の国吉崎に移られていた時代に、親鸞聖人の御真影を七年間にわたり護持したことに由来する。そして、石山合戦では、「番方講」の人びとが大坂本願寺を支援し続けたという歴史がある。

参詣されるので、今でも一〇〇名以上のご門徒がお参りされるといいます。また、報恩講では、毎年順番に、集落の一軒一軒の家庭がお軸を預かり、そこで報恩講が懇ろに勤修されるといいます。

このような歴史をもつので、集落に生まれ育った人びとは、みな蓮如上人のことを聞かされ、「番方講」の歴史を学びながら育っていく。集落の人びと皆が歴史を共有し、それを確認するかのようによ、法要へ参集されるのである。「それが、江州門徒ですよ」と、「番方講」をご紹介します。このように、当地の人びとにとって、「番方講」の一員であり、江州門徒であるということが、一人ひとりのアイデンティティ形成に關与していることが推察されるのである。

●集落外からお参りされるご門徒

さて、このようにお寺の法要に集まってくる集落外のご門徒の多くは、近隣の

町に住んでいらつしやるケースが多い。滋賀県の場合、彦根・大津などの県内の都市部や、大阪・京都といった地域に転出されていることが多く、特に近隣の町への転出である場合には、その後も月忌参りは継続されている場合が見うけられる。つまりご住職が、車などの交通手段を使って月忌参りに出かけているのだ。報恩講などの法要へ集落外からお参りになる方についても、「東京などから久しぶりにお見えになる方もいますが、多くは周辺の町に出られた方が、報恩講にご参拝されている様子ですね」と、あるご住職からお聞きした。集落自体は過疎化が進んでいても、お寺への帰属意識が残り、近隣の町から参拝されるということが起こっているのだ。

●法要へのお参りと集落の住みやすさ

しかし、残念ながら、前述の寺院のように集落外からお参りになられているケースが多くの寺院で見られるわけではな

い。通常は集落に残る高齢者などがお参りされるケースが多く、一人ご往生されると、お参りになる方が一人減っていくというのが、過疎地寺院の一つの実態でもある。

そのような中、「講」活動を中心とする寺院でのつながりは、「住みやすい」「帰りたい」「居場所のある」田舎作りに結びついているという指摘が、住職からあった。B寺院では、「お寺とのつながり」は、「門徒主体のつながり形成」となり、老人会への食事提供、行政の福祉活動のサポート、花見会、子ども向けイベントへの参画といった「寺院外」へ開く活動となっているという。つまり、「講」という歴史を持つ関係が、住民の集落への愛着、お寺への愛着となり、さらに、そこで生まれた人間関係が福祉的な活動へとつながり、住みやすい田舎作りにもなっているのだ。また、その結果、定年後に地域に戻ってくる人びとも出てきており、人口減少に歯止めがかかっている場合もあると聞いた。年を取ってか

ら安心して生活できるような環境が生まれ出されているためだろう。つまり、お寺が地域の歴史を保っており、その歴史が共有されることにより地域への愛着となり、人びとのつながりが生まれ、相互扶助の活動にもなっているのだ。

●沖永良部島の例

現在、日本のあちこちで人口減少が問題となっている。そうした中、過疎地が活性化し、人口減少が落ちている地域もある。徳野貞雄先生（熊本大学元教授）は、著書『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力』（農文協）の中で、鹿児島県の沖永良部島和泊町の例を挙げている。この地域は、年収が東京の半分以下の一九八万円であるが、出生率が高く、かつ高校卒業時に島を出た若者が二五歳前後からUターンしているため、人口復元の可能性を見出すことができている。当面は人

口減少が続くものの、やがて人口減少は止まる状況にあるのだ。それでは、沖永良部島和泊町には、なぜ人びとが戻ってくるのか。徳野先生は当地の詳細な調査を行い、まず、低所得ではあるが地域内経済の循環が維持されていると分析する。すなわち畑でとれた農作物のやり取りがあり、地域内で物が回っているため、外から高いものを買う必要がないので貧しさの実感はないのだそうだ。また地区対抗マラソンや敬老会での出し物コンクールなどによって、近隣の町に出ている人びとの帰村の機会があり、伝統的・人格的・共同体的・自然環境主義的な生活環境に魅力を感じられていると分析されている。「離島であることの空間的緊密性と、歴史的に近代化による社会関係の解体がそれほど進んでないことが、和泊町の社会的統合力を高めている」と徳野先生は結論づけている。和泊町の在り方を、現代社会に対する痛烈な皮肉のように感じるのは私だけではないだろう。

●村の活性化とお寺の役割

徳野先生の著作で沖永良部島和泊町のことを読んだとき、滋賀の真宗寺院を中心にした集落のことが思い出された。小さな集落に寺院があり、その寺院を中心として伝統的・人格的・共同体的な生活環境が整えられている。そして、そのことが集落の魅力となり、お寺の行事などでは近隣の町からお参りがあり、人口が少なくても、人の行き来がある。また、定年後、集落へと戻ってくる方がたもいる。徳野先生による「伝統的・人格的・共同体的・自然環境主義的な生活環境に魅力を感じられている」という分析と共通する要素が見られるように思われるのだ。

もちろん、過疎地の問題は複雑で様々な要因がはたらいており、お寺のはたらきかけだけで、簡単に解決できるような課題ではない。産業がなければ、また仕事があれば、住民が定住することも

難しい。子どもが全くない、集落に数軒しか残っていないといった物理的状況では、再生と簡単に言うこともできないだろう。また、そうした極めて厳しい環境の中で、数が少なくなつたご門徒一人ひとりを大切にし、お寺を懸命に護持されているご住職の姿も、調査の中で拝見してきた。そのため、安易に活性化・再生とは言えないが、たとえば今回の調査地域のように「歴史」を住民の間に共有していくということが、地域の解体を防いでいるような場合もある。お寺と地域の歴史は、しばしば緊密な関係にあるだろう。そうした歴史を保ち伝えていくという在り方に学ぶべき点があるのではないだろうか。

（浄土真宗本願寺派総合研究所副所長 藤丸智雄）

（参考）「講」について

『御文章』第四帖一三通には、「講」を「寄合」と呼び「そもそも、毎月兩度の寄合の由来はなにのためぞといふに、さらに

他のことにあらず。自身の往生極楽の信心獲得のためなるがゆゑなり。」「このうへには、毎月の寄合をいたしても、報恩謝徳のためとこころえなば、これこそ真実の信心を具足せしめたる行者ともなづくべきものなり。」「と、寄合が単なる飲食だけに終わらず信心獲得のためになるよう戒められている。

また、『本願寺史』には「講」について以下のような説明がなされている。

「講は奈良時代には、経論を講説する法会を意味したが、平安時代には、それが転じて信者が毎月一定の日に集まって仏菩薩や高僧の恩徳を仰信し、法義を讃嘆する会合を意味するに至った。さらに鎌倉時代にはそうした信者の集団をも講と称し、広く民間にも行われたところである。すなわち同信者が講衆として一定の日に集合し、仏菩薩を讃嘆供養し、また互に金品を醸出して関係行事を営んでいる。宗祖の時代には（中略）毎月二十五日同行が道場に集まって、共に念仏して一味の安心に住し、互いに相親しんだ。それと共に、各自報謝の懇志を醸出し合つて行事を営み、また宗祖の許に捧げ、宗祖なき後はこれを大谷本願（本願寺）へ上納した。（中略）ところで宗内においていわゆる講は蓮如宗主の時代から現われる。加賀能美郡に四講ができたとき、宗主はそれを「仏法興隆の根源、往生淨

土の支度」といい、「会合の時、仏法の信不信の讃嘆のほか、世間の沙汰然るべからず」といつて講の本旨をさとしている。（中略）また講においては、直接僧侶寺院の支配を受けることなく、むしろ僧俗の区別なく相互に同行の自覚のもとに行動し運営されていた。」

『本願寺史』第二巻 五〇九―五一〇頁 「講」の歴史は古く、また宗門においては信心を喜び、仏法が興隆する大切な場でありつづけていると言えよう。